

小児心因性難聴の動向

兵庫県立こども病院 耳鼻咽喉科

阪本 浩一

はじめに

心因性難聴は、小児の学童期にみられる難聴の原因として最も多い原因の一つである。近年、発達障害児の存在が広く認識されつつある。心因性難聴の原因の一つに、発達障害、発達遅滞など発達面の問題を抱えた症例が存在することが予想される。われわれは、心因性難聴の疑われた患児に、可能なかぎり、心理、発達面の評価を試みてきた。今回過去5年間の症例を検討し、心因性難聴の診断経過について、心理発達面の評価を加えて検討したので報告する。

対象と方法

2007年から2012年に、兵庫県立こども病院耳鼻咽喉科を受診した、心因性難聴と診断された126例、(男児37例、女児89例)である。

各症例に、純音聴力検査、語音聴力検査、クリック音刺激ABR、80Hz-ASSR、40Hz-ASSR、DP-OAEを適宜組み合わせで診断をおこなった。また、心理発達検査として、WISC-III、WISC-IV検査、バウム検査、PFスタディ、YG性格検査を取捨選択しつつ実施した。各例は、検査結果を参考に当科、あるいは当院精神科にて経過観察を行なった。

結果

症例126例の男女比は、1:2.4であった。症例の年次推移は、2007年16例、2008年12例、2009年18例、2010年23例、2011年は30例、2012年は27例と増加の傾向を示した。症例の初診年齢は、5歳から14歳ま

で平均8.7歳であった。そのうち男児の平均は8.4歳、女児の平均は8.8歳であった。難聴発見の経緯は、学校(幼稚園)検診によるもの79例(62.7%)、本人の訴えによるもの38例(30.0%)、家人の指摘によるもの7例(5.6%)その他2例(1.7%)であった。難聴は、両側性のものが101例(80%)、一側性が25例(20%)であった。心理発達検査は、新版K式発達検査2例、WISC-III知能検査48例(IQ:平均87.1)、WISC-IV知能検査35例(IQ:平均93.8)、バウム検査64例、YG性格検査49例、PFスタディ49例の検査を行なった。経過観察の可能であったのは81例で、その予後は、治癒・改善が50例(61.7%)不変・変動が、31例(38.6%)であった。

考察

今回、当科における小児心因性難聴の現況を報告した。2007年から2012年の検討では、その数は増加する傾向を示した。発症は、5歳から14歳におよび、男女共8歳前後が最も多かった。また、男女比は、女児が多かった。難聴の発見は、学校検診が多かったが、児自ら聞こえないとの訴えで受診に至る例も30%程度認められた。経過観察により60%に改善がみられたが、改善の見られない例も40%程度見られた。心理発達検査の分析では、発達がIQ80前後の軽度発達遅滞を持つ群、IQの低下はなく、下位項目のばらつきの大きい発達障害傾向を持つ群の存在が一定の割合で認められた。心因性難聴の発症の背景には、特定の原因によるものより、その児の集団における生きにくさの現れと考えられる症例が多く存在することが示唆された。